

## 韓国における学校社会福祉現場実習指導に関する研究

## ー指導マニュアル評価・終結段階の内容からー

○ 東京福祉大学 大門 俊樹（会員番号 6367）

キーワード：スクールソーシャルワーク実習、評価・終結段階、韓国学校社会福祉士協会

## 1. 研究目的

2009年4月より、日本社会福祉士養成校協会によるスクールソーシャルワーク（以下SSW）教育課程認定事業が開始され、日本においても大学におけるスクールソーシャルワーカー（以下SSWer）養成教育がようやく開始された。同課程では10日間のSSW実習が課されているが、十分な実習場所も確保できず、実習内容や評価指標についても不統一で、数多くの課題を抱えている。2014年8月には子供の貧困対策大綱が閣議決定され、5年後にSSWerを10,000人にするという計画が打ち出され、SSWer養成システムの確立は急務となっているといえる。日本においては多様な配置形態のもとでの指導となっているため、統一された実習指導のあり方を議論していくことはこれからの大きな課題であるといえる。

韓国においては、事業化前の1993年に学校社会福祉現場実習が初めて行われた。以来韓国では、長期間にわたり、常駐型学校社会福祉士と所属大学の教員からのスーパービジョンを受けるという実習形態が継続し、人材育成の大きな柱となっていた。

2004年より韓国学校社会福祉士協会は、学校社会福祉士の実習指導者の教育課程を開発し実施してきた。2010年には「学校社会福祉現場実習指導マニュアル」が著され、韓国の学校社会福祉現場実習において、標準的な実習指導の指針として用いられている。

日本と韓国では、実習形態や実習現場、実習指導者資格など、大きな相違点があるといえる。単純に比較検討するのが難しい点も多い。しかし、実習開始から20年の歴史をもつ韓国における指導マニュアルから、日本においても取り入れるべき内容について検討することは、今後日本においてSSW実習内容の統一化を図る際にも必要となると考える。

## 2. 研究の視点および方法

本研究ではまず、韓国学校社会福祉士協会ソウル支部で実施されている実習生共同教育の内容を再整理した。その後、「学校社会福祉現場実習指導マニュアル」の訳出を行った。同書は、①学校社会福祉現場実習スーパービジョンへの理解、②準備段階、③初期段階、④中間段階、⑤終結・評価段階に分かれており、全編の把握を行った後、本報告においては⑤終結・評価段階の内容に絞り、整理した。

さらに、韓国現地調査を行い、実習指導経験者より、マニュアルにある終結・評価段階の内容と実践状況について、聞き取りを行った。そのうえで、韓国において終結・評価段

階で行われている内容から、日本においても倣うべき内容について考察を試みた。

### 3. 倫理的配慮

本研究は文献研究を基本としているが、本学会研究倫理指針に則って研究を行った。

### 4. 研究結果

韓国において学校社会福祉現場実習指導者の要件は、韓国社会福祉士協会の社会福祉現場実習の指導指針に則っており、「社会福祉士1級資格をもち、社会福祉実務経験が3年以上」となっている。

実習指導の内容については、ソーシャルワーク事業法と韓国社会福祉士協会の規定を遵守し、各学校の学校社会福祉室で準備される。また、韓国では1学期実習は3～6月、2学期実習は9～12月と、長期実習の形をとるため、実習指導者は実習生に各自の力量と個々の関心を考慮し、実践現場に対して自信と達成感が持てるようケースを割り当てなければならないとしている。

同書によると、実習終結・評価段階は、①介入実践の評価、②実習評価、③実習指導の評価に大別される。

介入実践の評価では、実習生が介入した実践に対する評価が行われる。評価のための資料収集をしたうえで、プログラム評価と評価報告書が作成される。

実習評価では、実習生は実習総合評価書を作成し、実習指導者は実習評価書を作成する。その後、実習総合評価会議と実習報告会が行われる。

実習指導の評価では、実習評価アンケートによる機関（学校）実習指導に対する評価、実習指導者評価書による実習指導者に対する評価が行われ、実習指導者が作成する実習指導評価書に基づき、実習指導者のスーパーバイザーも出席する実習指導評価会議が行われ、実習生たちの意見をとりまとめてより発展した実習体系をつくっていく。

### 5. 考察

終結・評価段階で韓国から学ぶべき点として、①実習評価においては、韓国学校社会福祉士協会から共通評価書（2010）の様式が出されていること、②実習の終了時点で、実習生には実習総合評価書を作成させること、③実習生が計画・準備する実習報告会（学校別・地域別・所属大学別）が開かれること、④実習生が実習指導全体に対する評価を行うこと、⑤実習生のみならず実習指導者の評価も行われ、実習指導評価会議で実習指導者のスーパーバイザーからスーパービジョンを受けることなどが挙げられる。

このように韓国においては、実習機関により多少の差異はあるものの、終結・評価段階の共通のプロセスが確立しているといえる。今後日本においてはまず、SSW実習の評価についての議論を養成校間で進めていく必要があると思われる。

しかし、日本においてはSSW実習そのものが定着しているとは言い難く、当面は大学ごとの指導が中心になると思われる。実習場所も多様なため、それぞれの現場に合わせた十分な事前指導を大学で行い、まずは所属大学のSSW実習の体系化を目指したい。